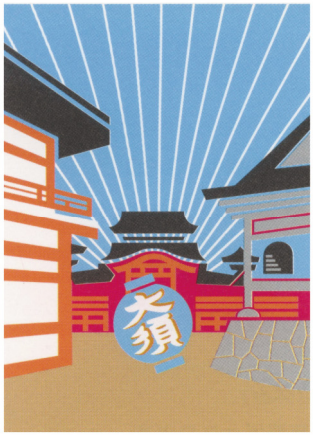

NAGOYA OSU Rotary Club
名古屋大須ロータリークラブ
WEEKLY REPORT No.1679
THE MAGIC OF ROTARY
2024-25年度R.I.会長
ステファニー A.アーチック

＜本年度クラブ会長方針＞

変わる勇気と変える勇気を持ち、
和の心でロータリーの輪を広げよう！

承　認　1985年2月12日　会 長　飯田昭夫　事務局　名古屋市中区栄4-7-10 栄第8ロイヤルビル6F
例会日　木曜日12時30分　幹 事　木村吉伸　電 話 (052)251-0181　FAX (052)251-0337　〒460-0008
例会場　名古屋東急ホテル　URL　http://www.nagoya-osu.org　E-mail　office@nagoya-osu.org

第1957回例会

ロータリー財団月間
令和6年11月28日(木)
会員卓話
於　名古屋東急ホテル

出席計算数　会員64名
60名中48名出席
出席率　80・00％
前々回出席率　84・75％

例会プログラム

★ビジター挨拶
（台湾桃園東陽RC会長）
★桃園東陽RC・桃園朝暘RC・桃園向陽RCバナー交換
★会員卓話

ロータリーソング

「われらひまわり」
指　揮　者　鬼頭　茂成
ピアノ伴奏　冨板　玲子

ゲスト

国際奉仕・青少年奉仕委員会ゲスト
高蔵幼児園園長　桑山　照代さん

ビジター

桃園東陽RC　会長　邱思蔵さん
桃園朝暘RC　会長　朱智暑さん
桃園向陽RC　会長　陳宥汝さん
※桃園東陽RC会員・ご家族・通訳含め台湾から総勢19名の皆様にご出席いただきました。

中部みらいロータリークラブ
青少年交換学生カウンセラー
杉村八千代さん

ニコボックス

桃園東陽RC、桃園朝暘RC、桃園向陽RCの皆さまようこそ！例会を楽しんで下さい。尾上さん卓話楽しみです。　飯田　昭夫

草野　勝彦・岩崎　征一
岡田　尚彦・横井　衛
木村　光徳・吉田　憲一
台湾の皆様、ようこそ。楽しんでいって下さい。高蔵幼児園の皆様大変お世話になりありがとうございました。木村　吉伸・尾上　昇
加藤巳千彦・林　順治
杉本　忠夫・内藤　啓喜
今日は渡辺観永様とのご縁で出席させていただきます。ありがとうございます。
中部みらいRC
杉村八千代さん

久し振りに尾上節の山の話楽しみにしております。　荻巣　賢二
一昨日スキーの初滑りに行ってきました。　吉田　隆彦
台湾桃園東陽RCの皆様いらっしゃい。日本を楽しんでいって下さい。　堀江　英弥
尾上さん、桑山さん、今日はありがとうございます。　鬼頭　茂成
今日の卓話楽しみます。　髙木　政義
台湾の皆様ようこそ。渡辺　観永
尾上さんユーモア？いっぱいの楽しいお話楽しみです。近藤　明美
結婚記念月です。　柴岡　正将

会長挨拶　会長　飯田　昭夫

皆さんこんにちは！本日は桃園東陽RC、桃園朝暘RC、桃園向陽RCの皆様が、午前中、我がクラブ会員の桑山光俊さんの雲心寺が経営しております高蔵幼児園を訪問し、この例会に参加されています。台湾の3RCの皆様、ようこそおいでいただきました。我がクラブの例会を楽しんでください。

会員卓話

「人は、何故山に登るのか　―ヒマラヤ登山今昔―」
尾上　昇

イギリスの登山家マロリーは、エベレスト3度目の挑戦の時（1924年）にジャーナリストから次の質問を受けた。「あなたは、どうしてそんなにまでしてエベレストに登ろうとするのか」この問いに対してマロリーは、「Because it's there.」と答えた。「何故ならそこにエベレストがあるからだ」である。

この答えが哲学的であるとか含蓄のある言葉だとの評価を得て、後日「人は、何故山に登るのか」「何故ならそこに山があるからだ」に言い換えられ現在も人の口端に上っているのである。

ヒマラヤ登山は、その登るスタイルが大きな変化を遂げている。50年程前までの8,000m峰の登山は、巨額な費用と大人数の隊員、それに対する膨大な装備や食料を要した。期間も準備を含めると1年近くに及ぶ。大遠征登山とか大登山隊時代と呼んだ。

ところが現代のヒマラヤ登山は、「より短期間に、より困難なルートを、より少ない人数で登る」時代となった。かつての8,000m

ヒマラヤ登山の略史

勃興期 ～一九五〇年頃

冒険・探険・探査の時代を経てアルピニストがヒマラヤに挑戦する。

・一八五二年エベレスト発見
・一九〇九年イタリア隊K2試登

隆盛期 ～二〇〇〇年頃

次々と未踏峰が登られる。八千M十四座が初登頂され、バリエーション時代到来。

・一九二一年イギリス隊第一次エベレスト隊派遣
・一九五三年イギリス隊エベレスト登頂
・一九五六年日本隊マナスル登頂
・一九七〇年東海支部隊マカルー南東稜登攀

転換期 ～現代

大登山隊が終焉し、速攻登山が主流の時代となる。

・二〇一九年平出・中島ラカポシ南壁登攀
・二〇二四年平出・中島K2西壁挑戦

登山もBCから頂上往復1～2週間、それを数人でやってしまうのだ。これをアルパインスタイル、日本語で速攻登山と呼んでいるが、正に速攻である。

これを可能にした理由は、第一に飛躍的な登山技術の進歩とギア（道具）類の開発、そして装備（衣料、登山靴、テントなど）の信じられないような進化が上げられる。食料の軽量化もそうである。それらは、50年前とは、はるかに想像を絶する進歩と進化と言ってよい。

でも大昔（マロリーの時代）も昔（大登山隊時代）も今もヒマラヤ登山の本質は、変わっていない。それは、ヒマラヤの頂、只一点を目指す行為であることと、その登る、登りたいと思う登山家達の心理心情である。

そしてその根底にあるのは、誰もやったことのない困難なルートからの頂への挑戦である。その過程が困難であればある程、厳しければ厳しい程、それを成し遂げた達成感や喜びは、その大きさに比例する。体の中にホルモンの一種のアドレナリンやドーパミンが分泌するのである。

そのホルモンは、登山家にとんでもない達成感と喜びを味わせる。エクスタシーである。日本語では、絶頂感と呼ぶ。そうすると次は、脳がもっとそれ以上のエクスタシー、絶頂感を要求する。

登山家は、どうするのか。行為をエスカレートさせるのだ。具体的には、今迄以上に困難な山登りに挑戦するのである。

これ迄に3,000人以上の人がヒマラヤ登山で命を落としているといわれている。つまり厳しいヒマラヤの登山は、常に死と隣り合わせなのだ。だからといって死んでもいいと思って挑戦している登山家はいない。そうでないとしたら、それは自殺行為以外の何物でもなく、単なる自殺志願者に過ぎない。死なずに目的を果たして無事に帰還するための細心の工夫と、それに伴う行動の実践こそが、真のヒマラヤニスト（ヒマラヤに登る人）なのである。

只、時に想像を超える状況に接し、その結果が死をもたらすことがあるということである。登山に僥倖を期待することは、絶体あってはならないのだ。

初めてという行為は、他のスポーツでも学問の世界にもある。オリンピックの金メダルやノーベル賞がその代表例である。水泳の岩崎恭子がオリンピックで金メダルを取ったとき、「いままで生きてきた中で一番幸せ」と表現した。でもそこには、先ず死は伴わない。

「死ぬ程面白かった」とか「こんな馬鹿らしいことは、死んだ方がましだ」などと人は気軽に使う。でも、人の行為の中で死と直面するのは山登りだけだと言ってよい。この「死ぬ程面白い」という言葉は、登山（ヒマラヤ登山）と言う行為のためだけにあるのだとするのは、いささか論理の飛躍というものなのであろうか。

皮肉な見方をすれば、戦争だってそうじゃないかと言う人がいよう。戦争は、愚である。愚は、論外である。

再度、マロリーに登場してもらう。そして「あなたは、どうしてそんなにエベレストに挑戦するのか」をもう一度伺ってみよう。きっとマロリーは、本音の「That so funny to death.（死ぬほど面白いからさ）」と答えるだろう。とするのも憶測の飛躍というものであろうか。

ビジター挨拶・バナー交換

（写真左から）
桃園東陽RC会長　邱思葳さん
桃園向陽RC会長　陳宥汝さん
桃園朝陽RC会長　朱智菁さん

「名古屋での豪華な冒険～ハイレベル幼稚園と大須RC訪問」

＊桃園東陽扶輪社FBより抜粋

桃園東陽RCは、2021年度から高蔵幼児園（雲心寺）・名古屋大須RCとオンライン交流を行っており、海を越えたミーティングを定期的に設置しています。今回、桃園東陽RCの国際ツアーで名古屋を訪れ、特に知識、感情、体の三位一体を重視する高蔵幼児園を訪問し、台湾の初等教育とは異なる幼児教育を体験しました。

雲心寺の幼い子供の受け入れや経典の礼拝などは、仏教の教えを通じて子供たちの心を安定させ、古詩を読んで知識を得ることは、大人になってからの気質を養います。更に特別なことは、子供の身体を育くむために様々な身体活動方法が数多く提供されていることです。台湾の教育経験で育ったメンバーに深く感動を与えました。

お昼からは日本の例会に参加しました。四十年の歴史をもつ大須RCは、海外で初めて例会に参加した桃園東陽メンバーにロータリー例会への想像を超えた違いを示しました。タイトなルーティンプロセスにもかかわらず、フォーマルだけど簡素でエレガントな雰囲気。洋食のフォーマルな雰囲気の中、大須のロータリーソングは生ピアノ伴奏で歌われました。

大須の大先輩の尾上昇さんが、50年以上前にヒマラヤを制覇した貴重な経験を示され、日本国民の強さと忍耐力をもって、どんなに苦しくともヒマラヤの頂上を制覇した喜びをお話ししてくれました。

大須クラブへの訪問は、私たちにロータリークラブの世界的な家族精神を引き出し、台湾と日本の温かな友好関係を更に重ねました。

名古屋大須RC会長をはじめ、皆様の温かいおもてなしに感謝します。また桃園朝陽RC会長、桃園向陽RC会長、親クラブである桃園東南RC P.P. Anjoさんにも感謝申し上げます。

公共イメージ向上委員会　横川　誠人
深谷　昭広・小笠原和俊
小澤　幸男・黒岩　麗子

＊本文は、原則、頂いた原稿を転載しています。